

舞鶴引揚記念館 令和2年度第4回企画展  
『新収蔵品展～紡ぐ記憶～』の訂正について

舞鶴引揚記念館では、次回の企画展として、昨年度（令和元年度）に収蔵した新たな資料を紹介する新収蔵品展を開催しますのでお知らせします。

1. 展示目的

シベリア抑留および引き揚げに関連する新たな資料を、未来へ「紡ぐ記憶」として紹介するとともに、引き揚げの史実を継承し平和の尊さを発信する資料の提供協力を呼びかける展示とする。

2. 展示期間

令和3年1月22日（金）～ 令和3年4月11日（日）

※展示期間中の休館日：2月18日（木）3月18日（木）

3. 場所

舞鶴引揚記念館 企画絵画展示室（企画展は無料。別途入館料が必要です）

4. 展示資料 総点数 38件 131点

内訳：令和元年度寄贈資料（36件 129点）

令和元年度資料画像等の貸し出しによる書籍等の成果品（2件 2点）

<参考> 年度別寄贈点数

令和元年度・・・52件 164点

平成30年度・・・36件 148点

平成29年度・・・47件 141点

平成28年度・・・51件 212点

平成27年度・・・90件 591点

平成26年度・・・46件 158点

平成25年度・・・44件 561点

平成24年度・・・27件 290点

【お問い合わせ先】

舞鶴引揚記念館：☎0773-68-0836、FAX0773-68-0370

E-Mail：hikiage@city.maizuru.lg.jp



## 5. 資料の概要

- ・ 作詞家・藤田まさと直筆の「岸壁の母」の歌詞
- ・ 脚絆
- ・ ドイツ兵と交換した帽子
- ・ 回想記録画
- ・ 俘虜用郵便葉書
- ・ 抑留中に着用していた防寒着
- ・ 引揚証明書
- ・ 旧海軍関係ソ連、北鮮、中京地区未帰還者名簿  
ほか

## 6. 主な展示資料

### ① 作詞家藤田まさと氏直筆の「岸壁の母」の歌詞



#### 資料内容

藤田まさと氏は歌謡曲「岸壁の母」の作詞者。今村家を新築した昭和52年(1977)12月末に新築を記念して寄贈者の伯父にあたる、藤田まさと氏にお願いして書いてもらったもの。昭和53年(1978)1月5日に東京に住んでいる藤田氏の家を訪問し、その場で書いてもらったという。

寄贈者：今村**志津子** (いほむら**しづこ**) 氏  
続柄：姪

作詞家藤田まさと氏について：

明治**41**年5月12日生まれ、静岡県出身の作詞家。代表曲には「旅笠道中」、「明治一代女」、「岸壁の母」などがある。そのうちの「岸壁の母」は昭和29年に全国的にヒットした歌謡曲で、戦争が終わっても帰らぬ息子の無事を信じて港の岸壁で待ち続けた母の心情を歌った歌詞は当時の人々の心を打った。

#### 【お問い合わせ先】

舞鶴引揚記念館：☎0773-68-0836、FAX0773-68-0370  
E-Mail: [hikiage@city.maizuru.lg.jp](mailto:hikiage@city.maizuru.lg.jp)



② 脚絆



寄贈者：森口賢次（もりぐちけんじ）氏  
続 柄：本人（舞鶴在住）

資料内容

戦時中から戦後帰国するまでの間使用していた脚絆。森口氏は終戦後、日本軍の命令で、天津に住んでいる一般邦人の引き揚げを進めるために天津の町から塘沽の港までトラックで民間人を移送する送還の事業に従事し、終戦後から8か月の間移送作業を行った。

③ ドイツ兵と交換した帽子



寄贈者：堤昭子（つつみあきこ）氏  
続 柄：長女

資料内容

寄贈者の父がドイツ兵と交換した帽子。交換した時期や場所については不明。ウズベキスタンのアングレンで約2年間の抑留生活を送り、土木や水路工事、民家の掃除などの作業を行っていた。抑留中には演芸会が開かれたり、タシケントへ訪問し、日本人抑留者が建てたナボイ劇場で映画を鑑賞するなど、ひと時の安らぎがあった。

【お問い合わせ先】

舞鶴引揚記念館：☎0773-68-0836、FAX0773-68-0370  
E-Mail：hikiage@city.maizuru.lg.jp



④ 回想記録画

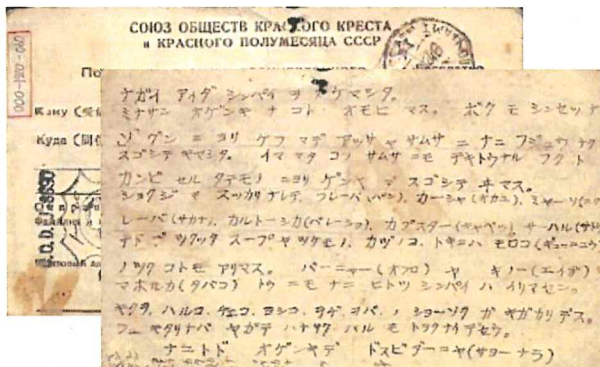


寄贈者：高田照夫（たかだてるお）氏  
続 柄：次男

資料内容

寄贈者の父が、同じシベリア抑留体験者の友人からもらった絵画。帰国後に抑留中の体験を描いたもので、裏に「この長閑そうに見える絵は牧野君と共にシベリア抑留の思出である 高田英夫」と記されていることから、父と友人の抑留中に共有した思い出の一場面と考えられる。

⑤ 俘虜用郵便葉書



寄贈者：井上則孝（いのうえのりたか）氏

続 柄：長男

資料内容

寄贈者の父から日本の家族へ送られた俘虜用郵便葉書。葉書には収容所での生活や、パンやおかゆとともにスープや漬物、数の子といったおかずも配給され、時には牛乳が出ることもあるなど収容所での食糧事情が詳しく書かれている。

※俘虜用郵便葉書とは抑留された人々と日本の家族がやり取りできる唯一の通信手段。

【お問い合わせ先】

舞鶴引揚記念館：☎0773-68-0836、FAX0773-68-0370  
E-Mail: [hikiage@city.maizuru.lg.jp](mailto:hikiage@city.maizuru.lg.jp)



⑥ 防寒服



寄贈者：小林恵子（こばやしけいこ）氏  
抑留体験者だった父・小林新一氏  
の遺品

続柄：長女

抑留地：ウテンデ地区

資料内容

寄贈者の父がシベリア抑留中、ウテンデ地区収容所建築作業時に着用していた防寒服。小林氏は昭和20年（1945）から23年（1948）まで抑留生活を送る。シベリアでは、ノミ、シラミが襟元などにたくさんついてたという。

【お問い合わせ先】

舞鶴引揚記念館：☎0773-68-0836、FAX0773-68-0370  
E-Mail：hikiage@city.maizuru.lg.jp

